



基本CG15枚+α

♡♡♡もつと癒ませて触手様♡♡♡

本編たっぷり100枚収録!

とある巨乳貧乳の 触手苗床化計画

「離しなさい、このっ……！」

あの子さえいれば、こんな触手なんて……！

昌子が内心で嘆いたとき、
地下室に1人の少女が入ってきた。

「お久しぶりでえす、昌子さん♪」

あおつき しょうこ
青月 昌子

ベテランの悪滅師。クールで知的。
性的には過敏なのだが、本人はまだ
気が付いていない。処女。

あしや みちる
芦屋 ミチル

駆け出しの悪滅師。
性格は、直上気味で突っ走るタイプ。

[illegible]

触手出産祭り！

触手風呂で∞イキ!!!

改造された乳首も有効活用!

触手責め地獄でイキ狂い!!!

触手責め地獄でイキ狂い!!!

大量の触手と魔物の巨子●ポで連続アクメ!

いぞ、好きなどにイッてしまえ！
ちもたつぷりと濃厚な精液を注いでやろう！」

んっ、あんっ、きやあんっ、ひあああんっ!!

だめっ！ イクッ、イクッ、
うっうっうっうっ……！」

くく、いいイキっぷりだ！
ふとして合格だぞお！」

1/2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841

あああつ……

量つ、出てるぅぅぅ……！

で熱いのが、ビュクビュクってっ、

あああああつ……!!?

「ギニョル様っ、」

「アタシもっ……アタシもくださあいっ……」

「もうらめっ♡らめええ♡頭おかしくなるのおおっ!!」

「離しなさい、」

グッ
グッ
グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

絡みついてくる触手からどうにか逃れるべく、必死に手足を動かす。

しかし柔軟な身体を持つ異形のモノどもは、私の抵抗を容易くいなしてくる。

そのくせ、まるで筋骨隆々な男のような力強さまであった。

どれだけ抵抗しようとも決して離れないそのしつこさ、胸中で焦りばかりが膨らんでしまう。

「……………あの子がいたら、こんなことには……………」

グッ
グッ
グッ



「お久しぶりでです、昌子さん」

「ミチルっ……ね、あなた、どうして「ミチル」……」

ドアから入ってきたその少女を見て、目を見開く。

芦屋ミチル、私の「仕事」におけるパートナーの少女だ。

なぜ「こんな場所」にいるのか問い詰めたいが、
しかし今はそれよりも優先すべきことがあった。

「お願い、ミチルっ……この触手を、どこにかしてっ」

「ええ、どうしてですかあ？
みんな可愛くていい子だし、抵抗なんてしてなくていいのに」

「え……ミ、ミチル……？」

「その子たちに身体を任せるとすっごく幸せになれるんですよ？
だから昌子さんもそうしましょうっ」

その瞳に、暗示や幻術で操られている様子はない。

「ミチル、お願いだから正気に戻って……」

万感の思いを込めた言葉に、ミチルはへらりと笑うだけだ。
直感的に、もうこの子は正気を保っていないのだと理解させられた。

ああ、どうして「こんな」になっちゃったのだろう。

サザン

嘆きとともに、あの日、ミチルと最後に言葉を交わしたときのことが鮮明に蘇ってくる……。――。

――私とミチルがとある学園を訪れたのは、数ヶ月前のこと。連続している女子学生失踪事件に、憎き“悪しきもの”の関与が認められたことが理由だった。

私こと青月昌子は、あおつき幼い頃より悪しきものを滅

滅するためだけに育てられた――悪滅師だ。そしてその相棒である芦屋ミチルも、同じく悪滅師。

私たち2人は悪しきものを滅ぼすために、失踪事件の相次いでいる学園に教師と生徒として潜入し、調査を始めた。

いつも通り、日常生活に紛れながら情報を集めて討伐をするだけだったのだが……。

ミチルは慎重に事を運ぶ私の方針が前々から気に食わなかったらしい。あの子は私の言葉を無視して単独行動を始め。

……結果、失踪した。

私はミチルを探しながら、並行して悪しきものの調査を続けていった。今回の悪しきものは、とあるアプリに寄生し、それを介して女子学生たちを魔界へと連れ去っていたことが判明した。

そうして放課後になり。

学生がいなくなったところで、

私は件のアプリをタブレット端末にインストールした。

ただ討伐するだけならば、

私1人でも問題ないという自負があったのだ。

しかし端末から現れたのは、悪しきものではなく触手だった。

一度に溢れだす触手も次第にその数を増やしていき、

何百匹も倒すうちに、ついに隙を突かれてしまい……。

抵抗虚しく、

私は魔界へと引きずり込まれてしまったのだった――……。



——随分と活きのいい女だな。
その女を見た俺の第一印象はそれだった。

「ミチル、お願いだから正気に戻って……」

「無駄だぞ。その娘は既に俺の虜よ」

「っ!? 貴様、何者だっ!」

「くくく、俺の名前はギニョル。

触手の王であるニョルヒム様にも認められた
超一流の触手フリーダーよ」

「つまり貴様が、今回の諸悪の根源というわけか?」

「悪とは酷い言い草だ。まあ否定はせんがな」

「貴様、ミチルに何をした?……」

「ふん、質問ばかりだな。いいぞ、教えてやるうじやないか。
俺は触手を繁殖させる専門の仕事をしている、
いわゆるフリーダーというやつだ。

触手の繁殖には様々な方法があるが、
苗床にもっとも適しているのは人間の雌でなあ。
だが人間は脆いだらう? 常に不足してしまうのだよ」

「まさか、そんな理由で多くの女性を攫っていたのか……」

「そんな理由とは酷いな。俺の手によって育てられた
触手や苗床は質がいいと魔界でも有名なのだぞ?」

お前の仲間であるあの小娘も苗床として出来がよくてなあ。
既に質のいい触手を何度も産んでいるぞ?」

「そ、そんなっ……なんて」とをっ……」



一度でも触手の良さを知ればお前も虜になるだろうよ。おい、やれ」



「はあい、よいしょと……昌子さん、アタシと一緒に気持ちよくなりましょうねえ」

「し、正気に戻りなさい、ミテル……」

「くく、さあアレを見せてやれ」

「な、何をするつもりなのっ？」

「なあに、見ていればわかるさ」

「ほおら、アタシこんなに素敵なのを貰ったんですよ」

言うやいなや、

小娘の陰核がムクムクと肥大化し――。



「ひいっ……!!」

「ほおら、すごいでしょお♪
これ、ギョル様からもらったんですよお♪」

ドクン、ドクン、
と小さな脈動を繰り返すツレは、
人間にとっては異形ともいうべき物体。

俺が手ずから小娘に寄生させた、
触手だった。

「な、何よそれっ……いったい、何なのっ……!!」

「触手だ。雄のな」

「お、雄の触手っ……??」

「俺が育成している触手は雌雄同体ではないのな。
雄と雌を交配させる必要がある。
人間とて雄には似たようなものがあるだろう?」

「そ、そんな……それじゃ、あれは……」



「コレすく気持ちいいんですよ？
それに、こんなこともできちゃうしい」

「ひいっ……？ い、嫌っ……」

「ほらほら、逃げちゃダメですよお？
昌子さんの可愛い乳首、

可愛がつてあげますからねえ」

「うっ……」

や、やめなさい、ミチルっ……！
お願いだから、やめてっ……！

//ov

//ov

//ov

//ov

「知ってるんですよお、

昌子さんが乳首にコンプレックスを持ってること、

身体を洗うときも、

そこだけはそっと触ってましたよねえ？

でも大丈夫、気持ちよくなれば

恥ずかしいことなんて忘れちゃいますよお、

こんな風に」

「や、やめなさいと言ってるでしょっ……
いい加減、正気に戻りなさいっ……」

ゼッ

ゼッ

ゼッ



「そんな風に強気でいられるのは今だけですわよ？
ほおら、そろそろ……」

「はあっ、んんっ……
やめてっばっ……んんんっ……」

「あはは、ほおらもう
気持ちよくなってきたでしょう？
乳首も……んなに膨らんじゃってる」

「嫌っ、見ないでえっ……んんっ、
くっくっ……嘘、
どうしてこんなにっ……んんんっ」

二ん二ん

二ん二ん

グッ
グッ
グッ

んん
んん
んん

「どうだ、気持ちいいだろう？ それが触手の良さだ」

「誰が、気持ちよくなってる……んんっ……
こんなの、おぞましいだけに決まってるじゃないっ……」

「そんな訳がないだろう。お前は知らないだろうが、
その粘液には催淫効果があるんだぞ？」

「なっ……!? 催淫効果って、何よ、それっ……、
んんっ、ふっ……！ ダメえっ……ひゅんっ……
乳首っ、そんなに擦らないでえっ……！」



「ほら昌子さん、これくらいはどつですかあ？」

「やだっ、ダメっ……」

そんなに強くされど、もうっ……んんっ、
んくうんっ、んんんうんっ……」

もうっ、やめてえっ……」

こんなっ、乳首なんかでえっ……」

嫌っ、嫌ああああっ……」

どこが甘酸っぱい

濃厚な香りがふわりと漂ってきた。

絶頂を迎える直前の匂いだ。

ハルッ

ブルブルブルブル

セッ

セッ

「んんんんんんんんんんんん……」

「あはは！ 昌子さんイッチやいましたねえ！

ほおら、この子すっごく気持ちいいじょー！」

「イッて、ないっ……」

「こんなので、イッてないんだからあつ……」

「んんっ、くうんっ……」

どう見ても絶頂を迎えているくせに、強情なやつだ。
まあ認めようが認めまいが「うち」は関係ない。
これからやることは、
最初から決まっているのだから。

「よし、続いだ」

「ひゅ……な、何をするつもりなの……まさかっ」

「くく、そのまさかだ」

「昌子さん、今度は一緒に気持ちよくなりましょうね……？」

正面からは小娘がにじり寄り、頬を緩ませながら熱い吐息をハアハアと漏らしている。

股間に生えた雄触手は、今か今かと快感を欲して小さく脈打っていた。

その様子に、女は自分がこれから何をされるのか察したようだ。

「お、お願いやめてっ私、まだ経験がないの……」

「あれえ、そうだったんですかあ……？昌子さんつてもう大人だし、経験くらいあると思ってました……」

「ええ、したことないのよ……だから、こんな初めては嫌なの……ミチル、あなたならわかるでしょうっ……」

「もちろんわかりますよ……安心してくださあい……」この子を使つて、すっごく素敵な思い出にあげますねえ……」

「そんなっ……!?
お願いだから、やめてっ……!!
嫌ああっ……!! ひぎいっ!!」

「これが、昌子さんの感触なんですね……
はあああ……気持ちよくて、腰動いちゃうっ……!!」

「ひいっ……嫌っ、動かないでっ……!!
本当に、痛いのおっ……あぐっ、んひいっ……!!」

「あああ……♪ なに、これっ……
思ったよりも、ずっと気持ちいいっ……!!」

「ひぎっ、んぎいっ……!!
動かさないでっ、言ってるの……!!」

「そんなのムリですよおっ……あああっ、
ああっ……こんなの知っちゃったら、
止まらないっ……!!」

「おい、遊んでないで役割を果たさんか」

「ほあい……昌子さん、いきますね……っ
んっ……は、あああ……!!」



「ひあんっ……!? 何か、中出てるっ……嫌っ、なにこれえっ……あっ、ああっ……」

「大丈夫、気持ちよくなるお薬みたいなものですよお……? ほおら、しっかり塗りますねえ……」

「ああああっ……!? そんなっ、さっきと全然違っっ……んはあっ……あああっ……」

放たれたのは催淫粘液。
先程いやらしい大ききの乳首を
可愛がつてやったときと同じものだ。
それを膣粘膜にたっぷりと注ぎ、
擦りつけてやれば……。

「はあっ……ああっ……これ、ダメえっ……ああっ……アッ、おかじくなるっ……んはああっ……」

「昌子さんの中、どんどん熱くなってきましたっ……あああっ……アタシ、もう我慢できないよあっ……」



「きゃあんっ、そんなっ、奥っ、強すぎっ……！
ああんっ、ひああんっ、あはああんっ……！
ああっ、もうダメえっ……！」

初めてなのにっ、
気味の悪いもので犯されてるのにっ、
私っ、私……！」

「あはあっ……！」

昌子さん、このまま出してあげますねえっ……！
いっばい、いっばい出しますからねえっ……！」

「嫌あっ、出さないでえっ！」

お願いだからっ、

嫌っ、嫌あああああああああ……！」

んはあああああああああああああああ
あああああああああああああああ……！」

「あはあっ……」中出し射精、
気持ちいいよおっ……」もっ、もっとおおっ……」

「ひあああっ!? らめえっ!!
出しながら動くのっ、らめえっ!! んはあっ!!
ひああっ!! あああああっ!!」

小娘が満足するまで、ひたすらにイキ狂うのだった。

「くく、随分とお楽しみだったな」

「くっ……ち、近寄るなっ……」の、化物めっ……」

もつと遊んでやりたいところだが……。

しかしせつかくの母体に
最初から無理をさせる訳にもいかない。
少しばかり、休ませておきましょう。

「ギョル様あ、アタシまだ物足りないですう……」

「ふん、少し待て。それも仕事だ」

「ミテル、いい加減に目を覚ましなさい……!」

「どれだけ必死に呼びかけたところで無駄だぞ?
俺が操っている訳ではないのだから」

暗示や催眠といった特殊な魔術を用いている訳ではない。

苗床調教を経て、小娘が自らの意思でこうなったただけだ。

「黙れ、貴様の言葉など信じられるか……!」

「ふん、本当に生きのいい女だ」

言っても信じられないのなら、見せてやるっじゃないか。

「気が変わった。小娘、可愛がってやるぞ」

可愛い触手たちを操り、
ぼんやりと様子を見守っていた小娘へと伸ばし――。



「待たせたな」

「はあ、はあ……ギニョル様、早くう……」

「どうした、そんなに欲しいのか？」

「はい……♪ 昌子さんとのセックスも
良かったけど、やっぱりアソコを
ズボズボ犯して欲しいんです……」

「くくく、そうかそうか」

「お願いしますう……♪
エッチな涎でいっぱい濡れてる穴に、
触手ハメしてえ……」

「いいだろう、いくぞっ」

「んはあああああああ……！
ぶっとい触手、きたあああ……」

「相変わらずいい反応だ。最初の頃が嘘のような」

「だって、気持ちいいから……」



「アタシは我慢を知らない淫らな苗床女です……
だから、もっとお……この触手で、グチヨグチヨになるまで犯して……」

「くく、もはや羞恥など捨て去っているな」

「はぁあんっ、あはあっ
あぁあんっ……」

「やだっ、す……」

「ほおら、まだいくぞお！
好きなだけよがり狂え！」

「んほぁあっ……」

「これっ、しゅきっ、しゅき……」

「感じすぎて頭おかしくなるぅっ……」

「んひあっ、あぁあっ、あはぁあぁあっ……」

「もうイッちゃいそうれすっ……」

「いいぞ、好きなときに達してしまえ！
同時にたっぷりと放ってやるっ！」

「はい、イキますっ……」

「んはあっ、あぁっ、あぁあんっ………きゅんっ、きゅんきゅん………」



正直こんなにあつさりど達させてやるのは好みではないが、
今回の目的は犯すことだけじゃない。
強情な女に見せつけてやるのは、犯した「その先」だ。

楽しむのはまた今度にして、今はただ小娘の身体に快樂を与えていき――

「ああんっ、ああんっ、
きやああんっ……！」

イツちゃうっ、イクっ、
イクっ、イクうううううう……

んっはあああああああああ
あああああああああ……

精液っ、すごい量きてるううっ……
熱いのが奥にビュービュー出てっ、

子宮でイクっ、またイクうううう……」



「んはああっ……♪
はあ……はあ……精液、いっぱい……♪」

長く出ただけあって、随分な量になったようだ。

はぁ……♡

はぁ……♡

小娘の乱れっぷりに
目を見開いて固まっている女に
視線をやりニヤリと見下ろした。

「くくく、さあて見ものだぞ。

ここからお楽しみだ。

この小娘の子宮には、雌の触手が寄生させてあってな。
雄の触手の精液を浴びれば……こうだ」

手のひらに魔力を込める。

ブリーダーだけが扱うことのできる、触手の育成を促進する魔術を発動し――。

未だに恍惚としている小娘の腹部に向けて、放った。



「くくく！ よおし、しっかり孕んだようだな！」

「く、苦しいっ………！」
ギニール様あ、お腹が破裂しちやいそうですっ………！」

「んひあああああつ……!!」

「じゅっ、じゅいっ、じゅいっのおおっ!!」

んほあああつ！ あつ！ あつ！ あつ！ あつ！

んはあああつ!? ひあああつ、ひああああんっ!」

『さあよく見ていろよ！ 触手を孕み、
しっかり育った状態で雄の触手を刺激してやると
——こうなる！』

『きてりゅっ、もうきてりゅっ……！』

んほあああ……！

出りゅっ、出りゅっ……！

んっはああああああああああああ

ああああああああああああああ

あああああああああああああ……！』

『おおお！ いいぞお、

可愛い子たちじゃないか！』

『ひやはあああああ……！ 出てりゅっ……！』

赤ちやん触手、フリフリ出てりゅっ……！

んひあああ……！ んはあああああああ……！』

イキ狂っている間も、膣口から溢れ続ける
大量の可愛い子供たちを産んでいる姿を眺めながら……。
俺は、いい苗床に育ったものだ満足感を覚えるのだった。

出産を終えたところで、小娘を床に捨てる。

「面白かったらうっ。お前にも、アしをやってもらっただろ」

「ひっ……」「いらないっ……い、嫌っ……」

「まずは馴染むのに時間のかかる雄触手の寄生からだ。いつもは股間に寄生させるよ」
「お前はいいモノを持っているからなあ」

「ひいっ……は、離してっ……
そんなもの、近づけないでっ……」

「そう怯えることはない、小娘の様子を見ただらう？　そう悪いものじゃないぞ」



「さあいくぞ？ 安心しろ、痛みはない」

「ひああっ……!? 嫌っ、嫌ああっ……!」

乳頭にススリと針を刺すと、女の抵抗が激しくなる。

「やだ、何か入ってきてるっ……!?
嫌、嫌あっ……! 変なものを流し込まないでっ……!」

悲鳴じみた懇願など無視して、針触手の脈動を続ける。

流し込んでいるのは、もちろん雄触手の「種」となる液体だ。

幼虫が蛹となった際に一度ドロドロに溶けているのと同じように、
触手の種はこのように液体として注いでいく。



そうして充分に乳頭内部を満たしたところで、ゆっくりと針を抜いた。

「ううっ……はぁ、はぁ……い、嫌ぁ……何、これ……」

「ほら、調子はどうだ？」

「ドクドクって、脈打ってるっ……ひゅっ……乳首の中に、何かいるっ……」

「くく、しっかりと根付いたようだな」

女の言葉通り、

その乳首は内側で何かが蠢いているかのようにヒクヒクと震えている。

植物や菌が根を張るように、少しずつ女の乳頭を我が物へと作り変えているのだ。

「さぁ、もうすぐだ。面白い」とになるぞっ」



「ひ、ひいひいひいひいひい……っ!!」

「ただでさえ大きかった乳首がもっと立派になったぞ！　よかったなあ！」

「嫌っ……こんなの嫌あつ……!!」
戻してっ……私の乳首、元に戻してよおっ……!!」





「んはあぁ……」

「どうだ、普段より敏感になっていて
気持ちいいだろっ？」

「何、これえっ……!?」

「乳首、変になってるっ、
ふぁっ、あぁぁっ……!!」

「ダメえっ……!! 頭の奥がチカチカしてっ、
んはあぁぁ……!!」

「まだまだこんなものではないぞ?
馴染めば馴染む程に
感度は上がっていくことになる」

「そんなっ、これ以上なんてっ……!!
ふぁっ、あぁぁっ……!! そんなの、
身体がおかしくなっちゃうっ……!!」

「くく、その快楽を受け入れてしまえば
楽になるぞ。あの小娘のようになぁっ」

「い、嫌あっ……!! それだけは、
絶対に嫌あぁぁ……!!
あっ、あぁぁ、んはあぁぁ……!!」



「さあ、いつまで嫌がっていられるかなあ!」

「んひあああつ……! おかしいのう、乳首から何か出ちゃうのおつ!」

「いいぞ、怖がらずにそのまま出してしまえ!」

「んはあああつ!? もうダメえつ! 出るう、出るう、出っちゃうちゃうつ……!」

「いいぞお、見事な射精だ!」

「ひあああああつ……! らめえつ、今ニルニルって擦らないでええつ……!」

「どうだ、良かっただろう？
それが雄の触手に寄生されることの魅力だ」

「くっ……私の身体を、元に戻さないで……」

「ふん。まだそのような態度を取れるとは、随分と生きのいい女だな」

雄触手を寄生させてやれば二度で堕ちる女のほうが多いというのに、
よほど精神的にタフのようだ。

あの小娘といい、特殊な訓練を積んでいるのかもしれないな。
だが、それならそれで楽しみ方はいくらでもある。

どうせ小娘もまだ意識を失ったままだし、その間に――……。

「ひあああ……!!
い、痛い……離して……!」

ギョッ
オッ
オッ

ギョ

ギョ

///
///

「くっく……。思う存分に暴れるがよい。

触手を宿して大きくなった乳首に騎をしてやれば、
生意気な口はきけなくなるだろう」

「どんな」をされたって……

化け物の思い通りにはならないから……」

「それで」そ調教のし甲斐があるというものだ」

「ひいいいいっ！ーちぎれちやうっ！ー」

乳首がちぎれちやうっ！ー」

「案ずるな。」

触手を宿しているから、ちぎれる」ではない」

「あああ……んぐっ……うっ……うっ……」

乳首が……あああ……」

「どうだ？ 乳首が気持ちよくなってきたか？」

「こ、こんな」をされて……」

気持ちよくなるはずが……んっ……んっ……」

「まだまだ強がる元気があるというわけか。
ならば、今しばし舐めてやろう」

「んああ……あああ……んっ……
んぐっ……んぐっ……。乳首が……熱い……」

「乳首に孕んだ熱は快楽の証だ。
おまえもそれを自覚しているんだろっ？」

「こ、こんな」をされて……感じるわけが……
んっ……はああ……うっ……」



「ほう。なかなかの強情ぶりだな」

そうやって抵抗されると、俺の加虐欲求はなおのこと高まる。
研究室内で揺れている触手たちに命じた。

「女の乳首を打ってやれ」

「ひらっ……あひっ……んああああっ!!
や、やめてえっ……! あっっ……!!
乳首が……乳首が痛くて……
おかしくなっちゃっっ……!」

打擲の一打ごとに、強烈な催淫作用のある
粘液が女の乳首へとすり込まれてゆく。



「あっ……あああ……あんっ……
乳首、おかしいっ……おかしいのぉっ……」

女自身も、はつきりと快楽を認識しているに違いない。

「うすれば、さらに気持ちよくなるぞ……」

「んはあっ……あああ……あひいっ……」

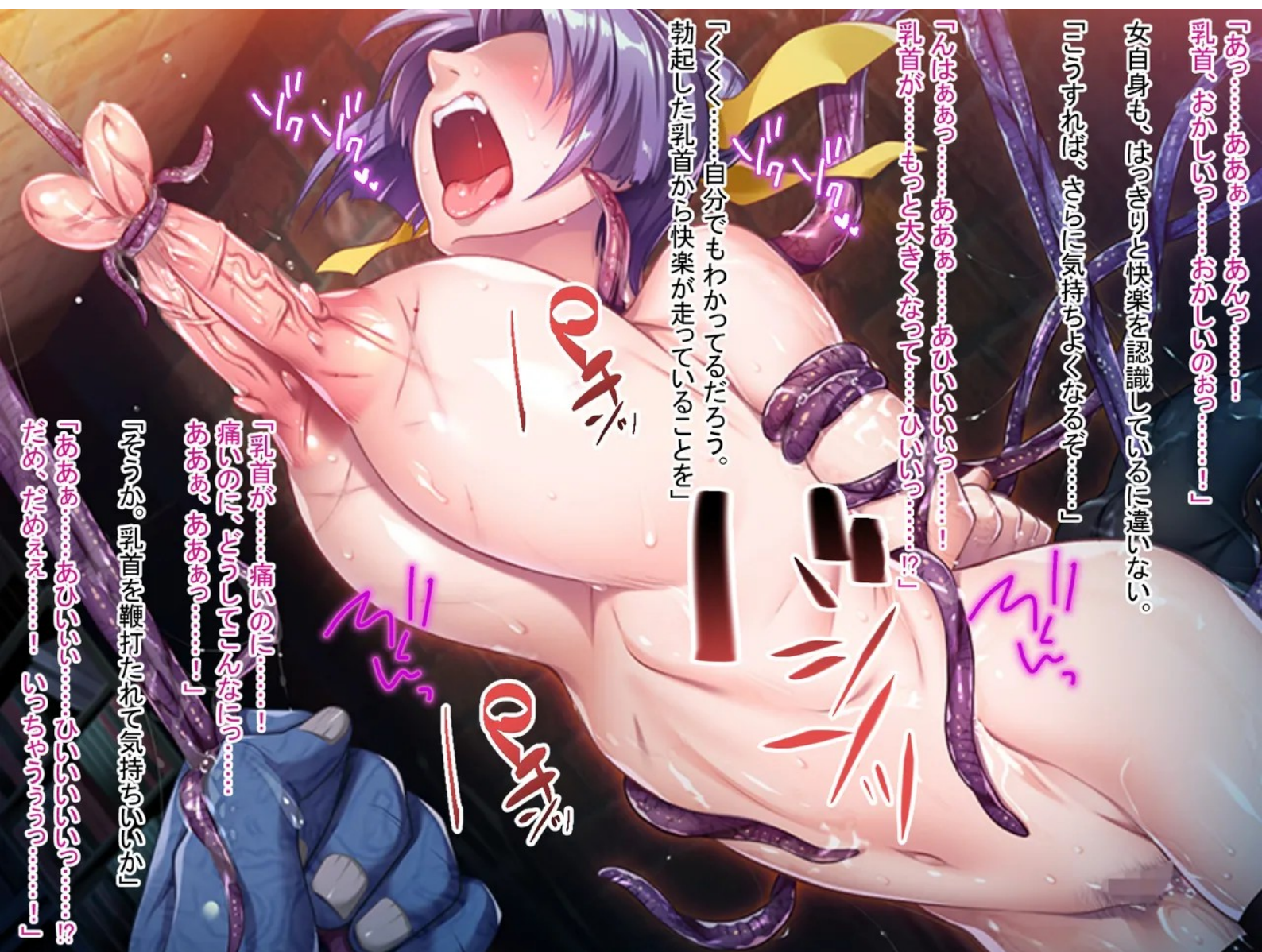
乳首が……もっと大きくなって……ひいっ……」

「くく……自分でもわかってるだろう。
勃起した乳首から快楽が走っていることを」

「乳首が……痛いのに……
痛いのだ、どうしてこんな……
あああ、あああ……」

「どうか。乳首を鞭打たれて気持ちいいか」

「あああ……あひっ……あひっ……
だめ、だめえ……っ……あひっ……」



俺はそんな女の痴態を上機嫌で鑑賞していくのだった。

「はあ……はあ……」

「落ち着いたか？」

「きやあつ……い、嫌……離して……」

「大人しくしろ、さっきのように気持ちよくなりたいだろう？」



「ひいっ……いっ……な、何をしたの……」

「わかるだろう？ 催淫粘液だ、大人しくしている」

「嫌っ、やめてっ……あうっ……ひいっ……」

触手を蠢かせながら、
粘液をネチネチと擦りあげる。

指の隙間からヌルリと入り込み、
執拗に秘所を塗っていった。

「よおし、こんなものでいいだろう」



「ひっ……な、何よ「れっ」……」

「そう怯えるな、これはお前ら人間どもの玩具だろう？」

女に着けたのは、
人間界で手に入れた貞操帯と呼ばれる玩具だ。

「な、何のつもりなのよ……」

「こんなもの、着けさせるなんて……」

「なあに、すぐにわかるさ」

エロ
パッ

あれだけたっぷりと催淫粘液を塗り込んだのだから、
すぐに効果は出てくる筈だ……。……。



「はあ、はあ……身体が熱い……どうして、こんな……」

「どうだ、もどかしいだろう？ 触りたくても触れないのだからな」

「だ、誰がこの程度のこと……はあ、はあ……」

強がってはいるが、
切なそうな表情は隠せていない。

乳頭に寄生した雄触手もすっかり勃起状態だ。

「随分と苦しそうじゃないか。どうだ、助けてやろうか？」

「はあ、はあ……こ、これ以上、何をするつもりなの……？」

「なあに、何かするのは俺じゃない。お前自身だ。」

先程の行為を思い出せ。その行為を自分でしてみればいいんだ。楽になれるぞ」

「はあ、はあ……楽に、なれる……」



「さあ、やってみなさい」

「ふああっ……んっ、はああっ……なに「れ、さっきより乳首がツクツクきてるっ……ふあっ、ああっ……」

「だって、自分で触るのも悪くないだろうっ？」

「や、やだっ……
そんなに見ないでっ……あっ、ああっ……」

視線を恥ずかしがる女だが、
その手と指の動きは止まらない。

「んっ、はあっ……」

ダメ、これじゃ身体の疼きが取れないっ……
はあ、ああっ……どうしたら、いいのおっ……」

「だったらもっと力を込めてみたらどうだ？
大丈夫、乳首は多少強くしても気持ちいいぞ」

「もっと、強く……？ 本当に、それでもっと気持ちよくなれるの……っ」

「……、本当だとも。なんなら試してみようかい」



「はあっ……あっ、ああっ……」

なに、これさっ……こんなの初めてっ、あっ、あああっ……」

乳首、こんなに気持ちいいなんてさっ……」

あっ、ああっ……アッ」より、すっぴん……」

「どうだ、寄生されるのも悪くないだろうっ？」

「それは嫌だけどおっ、あんっ、あああっ……」

でも、気持ちいいものは、

気持ちいいのおっ……あああんっ……」

「ほら、もっと違う触り方をしてみる。

そうだな、根本から抜くように刺激してみたらどうだ？」

「はっ、ああああんっ……」？

嘘っ、こっちのほうが気持ちいいっ……」

あっ、あっ、ああああっ……」！

やだっ、乳首っ、ビクビクしてるうっ！

さっきみたいに、まだ出ちやううっ！」

「~~~~~んんん……そのまもっ……」



「はぁあつ、あぁあんっ！
自分で触ってるのに、出るっ、出ちゃうっ！
ふぁっ、あぁあつ、んはぁぁぁあつ！」

自らの手で勃起した乳頭を扱きながら、
まるで乳搾りのように精液を噴出していた。

「んふぁぁあつ………!?
コレ、しゅごいっ……ふぁつ、あぁあつ………!?
自分で射精するの、しゅごいっ………！」

同時に絶頂も迎えているようで、貞操帯の隙間からは淫らな蜜が噴出している。

いいイキっぷりだ。気に入ったぞ。



「くく、どうだ？ 悪くなかったらう？」

「はあ、はあ……くっ……元々、戻せ……」

あれだけの痴態を演じておきながら、気丈にも睨みつけてくる。

さて、その態度はいつまで持つかな？

「う……あ、あれ……アタシ……？」

「ふん、ようやく目を覚ましたか」

「ギニョルさまあ……もつとお……」

もつと、アタシに産ませてえ……？」

「まあ待て、まずは女へ寄生させた雄触手の安定化が先だ。
お前も、女の雄触手で孕んでみたいだらう？」

「昌子さんの触手で、孕む……？」

「うわあ、それってすくステキですう……」

「だらう？ だがその前にしっかり準備をしなければな」

「こ、今度は何をやるつもりなの……？」

「なあに大したことじゃない。まずは雄触手の寄生を安定させねば、
その精液では雌触手を孕ませられんのだよ」



「そして雄触手の安定化を早める一番の行為は——「こっだ！」

「きゃあっ……!? 嫌っ、離してっ……」

「大人しくしろ。おい、やれ」

「はあい……」 昌子さん、
また一緒に気持ちよくなりましようね……?」

「ひっ……! いったい、何をするつもりなのっ……?」

「雄触手の寄生を活性化させ、
安定させるのに必要なのは同じく雄の分泌液……つまり精液だ。
」「こまで言えば、想像はつくだろうっ?」

「ま、まさかっ……! い、嫌あっ……やめて、「ないでっ……嫌あっ……」





「い、嫌あつ……抜いて、うああつ……!!?
抜いてっ、お願いだから抜いてええっ……!!」

「い、嫌あつ……抜いて、うああつ……!!」
抜いてっ、お願いだから抜いてええっ……

「どうだ？ 乳房の中を犯される感覚は」

「気持ち、悪いっ……うっうっ……
こんな感覚、知らないっ……ひぁあっ……」

「くくく、そのまま動き続けておけよ」

「はあい……♪ 命令じゃなくても、
気持ちよくて勝手に動いちゃいますうう……あはああ……♪」

「あひっ、ひいっ……うっ、うっ……うああっ」

「はあっ……あっ、んんっ……あっ……あっ」

「くくく、どうした？ 気持ち悪いと言うわりには、いやらしい声が漏れているじゃないか」

「んはあっ……あっ、あっ……
う、嘘……どうして、こんなことで……あっ、あっ」

女の声に、戸惑いと甘さが色濃く含まれます。
雄触手から分泌される粘液により、
快感を覚えずにはいられなくなってきたようだ。

「くくく、随分と良くなってきたようだな。
そろそろ、もう1つの乳首も疼いてきたんじゃないか？」

「誰がっ……んはあっ……う、疼いてなんてえっ」

「本当にそうかな。
俺の目には犯して欲がっているようにしか見えんぞおっ」



「くくく、こっちの乳首は俺が犯してやろう!」

「だ、ダメえっ……! 今、そっちの乳首もされたらっ!、
んはあああああああ……!」

「くはは、いい反応じゃないか!
そおら、たっぷり可愛がつてやるぞ!」

「んはあっ、ひあっ、んはあっ……!
もうらめえっ……!
こんなにされたらっ、
くもっ、きちゃっ……!」

「いっぞー! 好きなときに達してしまえー!」





「んはあああつ！ もうっ、もうらめえっ！
オッパイにズボズボされていくっっ！
いっぢやうっっっっ！」

「ギニョルさまあつ、アタシもっ、
出ちやいますうっっ！」

「こっちも出ずぞ！
さあ栄養満点の精液だ！
しっかり受け取るがいい！」



「んはあっ……」

「はあ、はあ……うう……こんなにいっぱい出すなんて……」

「どうだ、「うう」のも悪くなかっただろう？」

「はあ、はあ……もう、離して……」

「これだけ出したんだから、充分でしょう……？」

「何を言っているんだ？ 面白いのはこれからだろう？」

「ひっ……い、嫌……なに、これ……」

「なんだか、乳首が脈打ってる……？」

「さあ、坊やたち！」

「その可愛い姿をもっと見せておくれ！」



『よおし、成長した記念だ！ 楽しませてやれ！』

よほど楽しみだったのか、
小娘は俺が指示を出すまでもなく
いそいそと女に跨った。

「あはあああつ……昌子さんの、太おいつ……」

「んはあつ、あああああつ……」

「んはあつ……これ、すいっ
腰、勝手に動いちゃうっ……」
あはあああつ……」

「あああつ……ダメっ、
動かないでえっ……ひあつ、ああつ、
そんなに擦らないでっ、あああんっ……」

「あはあつ、あんっ……
昌子さん、どうですかあつ……っ
触手でいっぱい鍛えられたマタンのハート、
ああんっ……気持ちいいですかあつ……っ」





「ひああああっ……」こんなの激しすぎっ、
あっ、ああっ、あああ……」

「ああっ、これっ、すごいっ、あああんっ……」
さっ一緒に入ってるから、
色んなと「一気に擦れてるっ……」
あはっ、あっ、あああんっ……」

「きゃあんっ、あっ、あっ、あああんっ……」
ああっ、もうダメっ……」
また、きちゃっ……」
頭が、真っ白になっちゃっ……」

「アタシも、もうダメっ……」
昌子さんの、気持ち良すぎっ……」
ああんっ、きゃあんっ……」



「きゃんっ、ああんっ………
ああっ、もうダメえっ………
もう、出ちゃっっ………出ちゃっっっ………」

「きっっ、熱い精液
びゅくびゅくって出してええっ………
あっ、あっ、ああんっ………
アタシも、もうイクっ、イクっっっっ………」

女と小娘が、同時に絶頂を迎える。

「んほあああ………
しゅっっ、しゅっっのおお………
子宮おかしくなりっっ、
こんなに出来るとバカになりっっ………」

「あひあああ………
止まらないっ、止まらないのおお………
んほっ、ほああっ、んほあああ………」

「ふん、今度はこいつが気を失ったのか」

「めんなさい、少しやりすぎちゃいました」

「まあ仕方があるまい。さて――」

行為が終わるやいなや気絶した女に向けて、魔術を使う。
この魔術もまた「フリーダー」のみが使える特殊なもので、
触手の成長具合を確かめられるのだ。

「ふむ、まあ予想通りと言ったところだな」

いい具合に仕上がってきているが、
まだ孕ませるには足りないようだった。

しかし寄生自体はほぼ安定しており、
何かの拍子で剥離させられるようなことはもうあるまい。

……そろそろ、雌触手を寄生させてもいい頃合いかもしれんな。

しかし雌触手は少しばかり特殊で、
良い苗床にするためにはより魔力の満ちた空間で行う必要がある。
いや正確にはどこでも可能なのだが、質が落ちてしまうのだ。
俺は二級品などには興味がない。

やるならば、最高の場所へ移動する必要があった。

「おい、移動するぞ。その女を抱える」

「移動って、もしかして……あそこですか？」

「ああ、懐かしいだろう？」

小娘が、瞳をキラキラと輝かせながら頷く。
「いつもあの場所で徹底的に快樂漬けにしてやったのだが、
だから」そ今となつてはいい思い出になるだろう。

「さあ、転移するぞ」



「わあ、なんだか懐かしい……!」

「ふむ、何度来ても素晴らしい場所だ」

転移の魔術で跳んできたのは、人間界。
多くの触手が蠢き、濃密な魔力が充満している、
魔界よりも魔界と化した特別な家だった。

……以前、触手の王であるニールヒム様が
戯れに人間界に手を出したことがある。

ニールヒム様は、そのときの場所だ。
俺はニールヒム様に高品質な触手や苗床を上納する役目のために、
この場所も下賜された。

「う……」「ニールヒム様は……?」

「ふん、ようやくお目覚めのようだな」

「な、何なの?」「ニールヒム様、何なの?」

「そろそろ雌触手を植え付けてやろうと思っただけ、
そのための場所だ。どうだ嬉しいだろう?」

「い、嫌……近づかないで……!」

「くくく、最初の頃の威勢の良さはどこへいったんだ?」

「ギニールさまあ……昌子さんばかりずるいですっ」

「しばし待て。この女の後で、心ゆくまで可愛がってやる」

小娘は不満そうだが、適当にあしらっておく。
そうして触手で手早く女を拘束し、女の肉体を担ぎ上げた。

「あああ……な、何をするつもりっ?
やめて、放してっ! 放してっ!」

「おまえを触手の苗床にしてやる。光栄に思え」

「ひいっ……!? 何……? 何なの、これはっ……!」

「触手の幼生だ。俺が丹精込めて育てた子らだ。可愛いだろう? これを使ってお前に快楽を教えてやるっ」

「ひっっっ! いや、いやああああ!」

「くく、怖がる」とは無い。すぐに癖になるだろう」

「いやあああああっ! いやっ、いやあああっ」

「たまらぬな。見事な裸踊りだ」

「お、お願いします……! やめてくださいっ、お願いします……!」

「あの小娘も、おまえと同じように哀願していたぞ。しかし、今ではすっかり触手の虜だ」



キキヤ...



[illegible]

「んあああ……はあああ……あああああああああつ!!
乳首がああ……乳首が熱くて……
あああ……出てるっ、噴き出てるっ……」

「くく、イッたか。
しかし、まだ終わりではないぞ?」

「ひあああ……
らめえっ、動かないでええ……
イッてるのっ、もっ……」

「くはは……ほおらイッて……
もっ……」

「あああ、あつ、んほあああ……
ま、またあ……またいつちやう……
ひいっ、んあああ、あひい……」



「ひあああつ、あつ、あああつ!?
無理っ、もう無理いつ! おかしくなりゆつ!」
「こんなのおかしくなりゆつ!」

「いぞ、おかしくなつてしまえ!」

「いづ、もういつちやうなつ、
さつきよりす」のっくろっく
きちやうつ、きちやうつ、きちやうつ、
あへあああああああああああつ!
止まらないいつ、ビュービュー出てつ、
止まらないのおおつ……!」

噴出しているのは精液だけではない。

小さな尿道回も、
まるで水鉄砲のように
潮を撒き散らしている。

人間との交わりでは決して
味わい得ぬほどの快楽を与えられて
激しい潮吹きを披露していた。

「くく……」

一匹の牝となって
よがり狂っている女を、
俺は満足感とともに
見下ろしているのだった。



「やっ……」

小娘の相手をしてやるか。

「あああ……ギニョル様……」

「お前の貧相な乳房で俺のものに奉仕しろ」

「んっ……はああ……ああんっ……」

ギニョル様の、大きい……あっ……あんっ……」

「どうだ、俺のモノは。久しぶりだろう？」

「あああ……んっ……はい……ギニョル様のモノに

「ご奉仕させていただいて……嬉しいですよ……、

あああ……はああ……ああんっ……」

ギニョル様に「ご奉仕していると……あんっ……」

「奉仕をしている身でありながら快楽をむさぼるとは。呆れた淫乱ぶりだ」



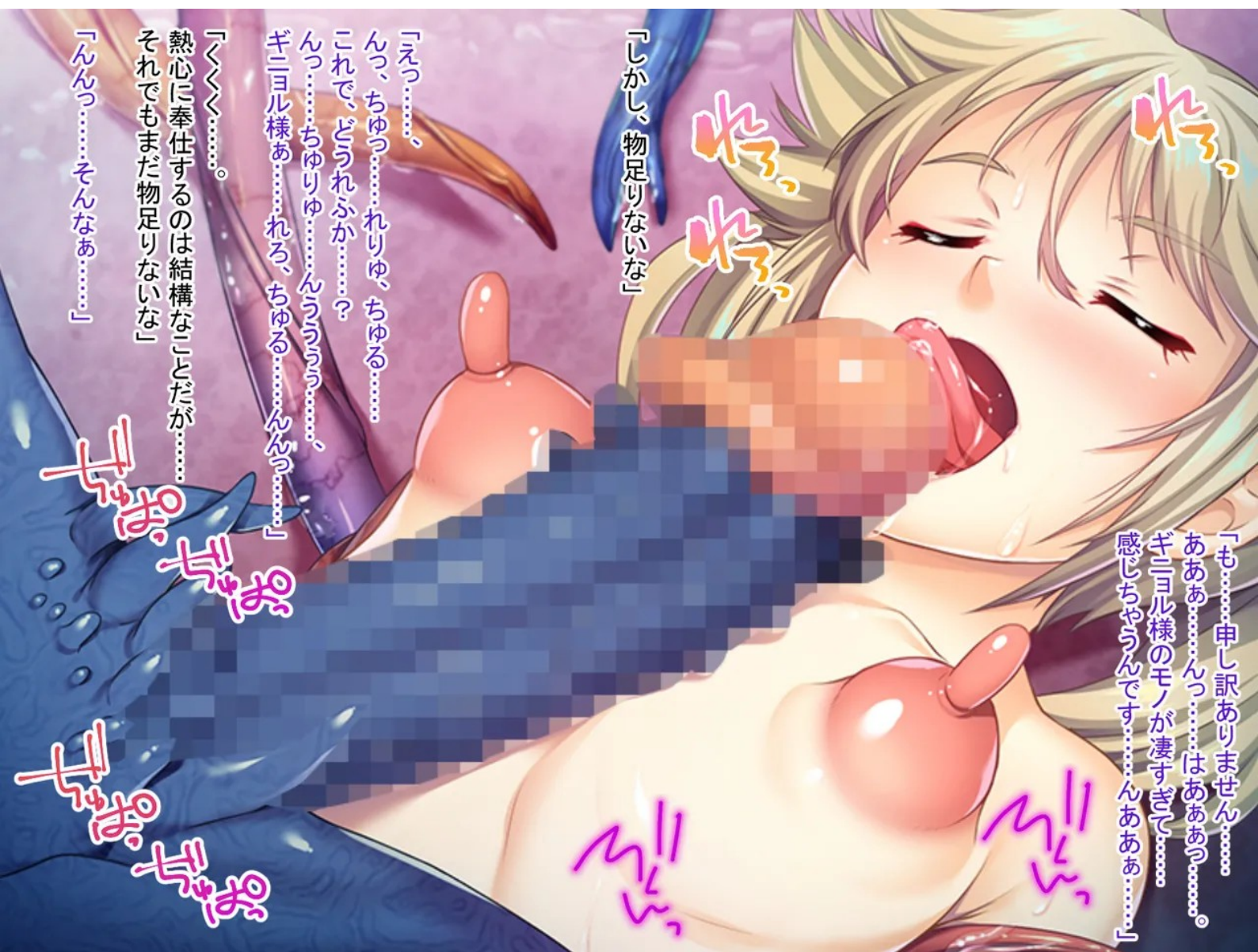
「も……申し訳ありません……
あああ……んっ……はあああ……。
ギニョル様のモノが凄すぎて……
感じちゃうんです……んあああ……」

「しかし、物足りないな」

「えっ……、
んっ、ちゅっ……れりゅ、ちゅる……
これで、どうれふか……？
んっ……ちゅりゅ……んっ……んっ……、
ギニョル様あ……れろ、ちゅる……んっ……」

「く……。
熱心に奉仕するのは結構なことだが……
それでもまだ物足りないな」

「んっ……そんなあ……」





「ああああ、んあああ、あひいいうっ………!!」
乳首っ、痛いのにっ、痛いのに気持ちいい

「ここまでされてすら感じてしまうとな!」

「ゆづ、ゆづ……
乳首っ、おかしくなりゆうっ、
んほあっ、あっ、あああっ……」

「おかしくなってしまうえ！ そら！ そおら！」

「んほあああつ、ひあつ、あああつ、
んはああつ、ひあああああんっ……………」
もうっ、らめええっ……………いぐっ、いっぢやっ……………」

「ああ、いいぞ！好きなときにイッてしまえ！」



「はいっ、いぎますっ、
オッパイをオナホにされながら、
いぎまじゅっ……..
んっほおおおおおおおお
あああああああああああ
あああああああああっ」

「~~~~~」

——そして、射精も落ち着いた後。
俺は浴室へ行き、そこでまだまだ
イキ狂っている女を回収するのだった。



「さて、お待ちかねの雌触手の寄生というっか？」

「い、嫌っ……もう、これ以上はやめてっ……」

「くくく、諦めろ」

「あの、ギニョル様。」

その前に、アタシの乳首も
今よりもっと気持ちよくしてほしです」

「ん？ どういうことだ？」

「だって昌子さんの乳首、
羨ましいから……ダメですか？」

「ミチル……!？」

あなた、どうしてそ」まで……」

「昌子さんは黙ってて。」

ギニョル様、お願いします」

「……ふん、仕方がない」

面倒だが、これもまた苗床の品質を維持に必要なだ。

生物である以上、精神状態によって浮き沈みは
どうしても発生してしまうもの。

不満ばかりが溜まると、苗床としては劣化していくのだ。

なんでも願いを聞き入れてやる必要はないが……。

この程度ならば許してやってもよからう。

……だが、女と全く同じというのも面白みに欠ける。

せつかくならば、また違う改造を施してやることにしよう。

「よし、やるぞ」



「それじゃ、よろしくお願いしまあす♪
ああん……ギニョル様、くすぐりたいですよ……ん」

「ふん、我慢しろ。」

痛みに苦しまなくて済むよう麻酔代わりに
催淫粘液を染み込ませてやってるんだ」

「痛い」としちゃうんですかあ？」

「そのために粘液を塗っているんだろう？」

「はあい……んっ、あはあっ……」

「キドキしてきちゃいましたあ……はあ、はあ……」



「あああああああつ……ん」
なにこれ、すこいっ……
乳首に穴ができたやつてるうっ……ん」

「よし、中も作り変えていくぞ？」

「ひああんっ……嘘っ、

オッパイの中、弄られちゃってるうっ……

あつ、あああつ……気持ち、いいよあつ

ふあつ、あああんっ……ん」

触手に栄養満点なミルクが与えられるように、
専用の乳腺でも作ってやることにした。

「んっ、ふああつ……はあっ、あつ……ギニョル様あ、
もっとおっ……あつ、あああつ……」

「……………。ふむ、こんなものかな」



「はあ、はあ……うわあ、乳首大きくなっちゃったあ……♪」

「どうだ？ 自分でも変わったことがわかるか？」

「はい……オッパイがすくくむずむずして……
それと、なんだが張ってますぅ……ん」

「ふむ、痛みなどはないだろう？」

「はい……はあ、はあ……ギニョル様あ、
アタシのオッパイ、どうなっちゃったんですかあ……？
教えてくださいさあい……」

「ギニョル」

「いいだろう、どうなったのか教えてやる！」



「んひあああああああああああああああああああ……」

乳房を締め付けたその瞬間、小娘の乳首から母乳が噴出する。

「くく、どうだ！「これが欲しかったんだろっ!」

「うひひひ、うひひひ……」

あはあつ、あああつ……」

オッパイ、気持ちいいよおっ……」

んひああつ、あああああつ……」

イッている最中の敏感な身体は、
甘い刺激に抗うことなどできない。

小娘は母乳を撒き散らしながら、
連続で達し続けていた。



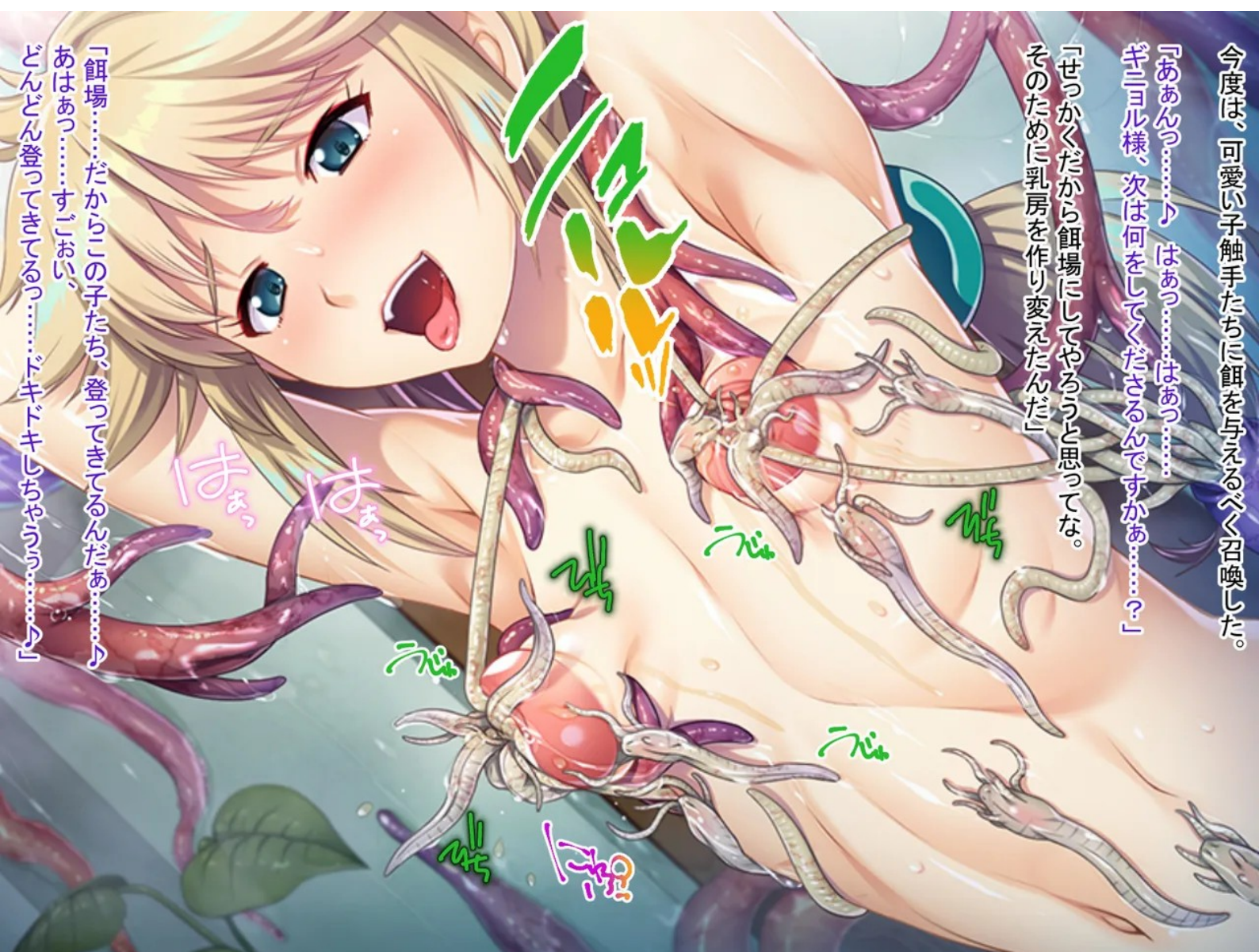
今度は、可愛い子触手たちに餌を与えるべく召喚した。

「ああんっ……♪ はあっ……はあっ……」

ギニョル様、次は何をしてくださるんですかあ……？」

「せっかくだから餌場にしてやろうと思ってな。
そのために乳房を作り変えたんだ」

「餌場……だからこの子たち、登ってきてるんだあ……♪
あはあっ……すっおい、
どんどん登ってきてるっ……♪ キキキじちゃっっ……♪」



「んはあああつ……!!
なにこれっ、オッパイの中でいつぱい動いてるっ、
んひっ、あああああつ……」
しゅっ……」

「くく、どうだ? 可愛い子供たちに餌を与えている気分は」

「気持ちいいっ、れしゅっ……」
ひあつ、ああつ、んはあああつ……」

「そうかそうか、子供たちも喜んでいることだろう」

「らめっ、少し止まってええっ……!!」
んはあああつ、ひいっ、んひあああつ……!!
さっきより気持ちいいの、近づいてきてりゅっ……!!」

「いいぞお、イッてしまえ!! さあ子供たち、もっと激しくしてやりなさい」

「んはあああああつ!! らめっ、らめっ、もっらめえっ……」
「……」

『ひはああああああああああああああああんっ………!』

「おお、これはまだ随分と濃厚な母乳だな！
ほおら子供たち、たとと召し上がれ！」

「んひあああああつ!? らめつ、らめれしゅうつ! いうでるのにいう! しゅごいのきてりゆのにいう! んはあああつ! はあああああんつ!?」

母乳噴出の快感と、子触手たちが蠢く快感。
ただでさえ強烈な快楽が、しかも2つ同時ともなれば、
その大きさは語るまでもなく……。

小娘は、正気を失ったかのように盛大に乱れていった。

「ミ、ミチル……？ あなた、大丈夫なの……？」

「えへへ……もつとお……もつと気持ちよくなりたあい……」

「きやあつ!? ミチルっ、あなた急に何をっ……」

「ちょうどいい、このまま仕上げに入るか」

「はあ、はあ……気持ちいい」となせつえ……」

「ひっ……!? 嫌っ、やめてっ……」

「お願いだから……正気に戻ってっ……」

「お前の雄触手で女を犯してやれ。」

「そうすれば、お前の逸物にくっついてる雌触手が女の子宮に寄生する」

「はあい、頑張りますっ……」

「ぞ、そんなっ……!? やめてっ、そんなモノを寄生させようじゃないです……」



「ふん、そんなモノだと？ 生意気なやつめ」

「はあ、はあ……もう、我慢できないよお……早く、やらせてな……」

「ああ、待たせたな。やっていいぞ」

んんん

おほん

IP、IP、IP、IP

IP、IP、IP、IP

「んはああああああああん……」

「あはあ……もっ、もっとおっ……もっ、もっとお持ちよくして……」

「んはあああ……」

「そんなっ、いきなり激しいっ……ああんっ、

ああっ、ひああっ、あああんっ……」

嫌あっ、太いのっ、擦れるうっ……」

ひあっ、あっ、あああんっ……」

「ああっ、気持ちいいよおっ……」

「これ好きいつ、セックス大好きいつ……あっ、あっ、あああんっ……」

「あひいいい……奥っ、ダメえっ……」

「そんなに挟られるとっ、きちゃうっ、きちゃうっ……」

IP、IP、IP、IP

「あはあっ、出る、出るうっ！ もう、出ちゃううっ！」

「待ってっ、お願いっ、待ってえっ！
イッちゃうっ、イクっ、イクっ、いぐっ、いぐっ、いぐっ……」

「あっ、あああっ、はあああああ……
すごい、オッパイの中でウネウネしてっ、
いつもより気持ちいいよおっ……
あっ、あああああ……
んはああっ、まだ出てる……」

「いやっ、出さないれっ、んほああっ、
おっ、おほおほおおおっ……」

「くくく、盛大にイッてしまったなあ？」



「喜べ、女。お前の子宮に雌触手が寄生したぞ」

「あああ……そんな……
あんなものが、私の中に残ってるなんて……」

「案ずるより産むが易し、だ。
小娘がそうなったように、お前も触手出産の虜となるぞ」

「ギョルさまあ……
私、まだ足りないんです……
もっと、させてえ……っ」

「よかろう。犯してやるがよい」



「あああつ、はあああつ、ああんっ……!!
そんな、少しくらい休ませてえ……!!
あひいいい、はああんっ……!!」

「はああつ、さっきより気持ちいいかもおつ……!!
あつ、あつ、ああああんっ……!!」

飢えた牝獣のように鼻を鳴らしながら、
小娘は荒々しく腰をつかっていた。

悪滅師を称していた過去は、
もはやすっかり頭になかった。

「くくく、好きなだけするがいい」

子宮に寄生したばかりの雌触手を馴染ませるために、
膣性交で快楽を与えてやらなければならない。
むしろ、何もせずに済むのであれば楽ができるというものだ。

さてそれでは、俺は暇潰しがてら次の苗床となる女でも
引っ掛けにいくとするか……。



……そうして、しばらく経った後。

俺は普段のようにアプリを介して人間の雌を攫い、
ある程度の仕事をして戻ってきた。
そして、その間ずっと放っておいた女と小娘は……。

「んはあつ、あつ、ああつ……
もう突かないでえつ……んはあつ、ひああつ……」

「あはあつ、あつ、ああんつ……
昌子さんの中、気持ちいいよお、
ああんつ、ああんつ……」

「なんだ、まだやってたのか」

数時間は経ったというのに、小娘は夢中で腰を振っていた。
普通はとくに気を失っていきそうなものだが、流石は悪滅師。
基礎体力が違うというわけか。
では、そろそろ最後の仕上げというところか。

「おい、いつまで楽しんでいるつもりだ！こっちへ来い！」





「はぁ...はぁ...今度は、なに...?」
「はぁ、はぁ...ギニョル様あ...」
「気持ちよくしてくれんですかあ...?」

「ぐくぐ、いい塩梅になってきたじゃないか」

いやらしい様相に、見ているだけで

股間のモノに血が集まってくるのがわかる。

みるみるうちに勃起が始まり、猛々しくそそり立った。

これなら、最後の仕上げ——

俺の精液を注いでやることに、何の問題もなさそうだ。

「さあ、どんなものか試させてもらおうぞー」



「んはあああああ……!?」

「おお、これはこれは……
いい具合じゃないかつ。
合格だ、次は感度だな!」

「ひあああんっ、そんないきなり激しいっ……!!
きゃあんっ、あんっ、ああっ、ひあああんっ……!!」

「くくく、感度もよくなったなあ!
あれだけ犯されておきながら、
締め付けも濡れっぶりも「一級品だ!」

「あっ、あっ、ああんっ……!!
そっつ、だめえっ……!!
そんなにされるとっ、またあっ!!
またきちゃうっ! きちゃうのおおっ! あんっ、あああんっ!!」



「いいぞ、好きなときにイッてしまえ！
こっちもたっぷりと濃厚な精液を注いでやろう！」

「あんっ、あんっ、きやあんっ、ひあああんっ！
もうだめっ！イクッ、イクッ、
イクっ……！」

「くくく、いいイキっぷりだ！
苗床として合格だぞお！」

「ハッ……♡」

「あっ、あああ……
凄い量っ、出てるぅ……！」

「濃厚で熱いのが、ビュクビュクっ……
あっ、あああああ……！」

「ギョル様っ、
アタシもっ……アタシもくださあいつ……！」

「いいだろう、いくぞ！」

「あはあああつ……!!」

「これっ、すこいっ、あんっ、ああんっ……!!」

「太くて硬いの、ズズズンきてるぅっ……!!」

「くっ、いい締めりだ！ 押し潰されそうだなぞ」

「だって、ギョル様が

気持ちよすぎるからあつ……!!

ひあんっ、あああんっ……!!

「アタシのキツ穴、喜んじゃうんですぅっ……!!」

ひああっ、あああんっ……!!」

「よし、いいぞお……!!」

「あんっ、あんっ、あああんっ!!」

「アタシっ、もうきてるっ、きてますぅっ!!」

「太くて立派なおハニスで、

イッちやいそうですぅっ!!」

「イク、イクますぅっ!! イクッ、イクっっ!!」

「んはあああああああああああああああああ
あああああああああああああんっ……………」

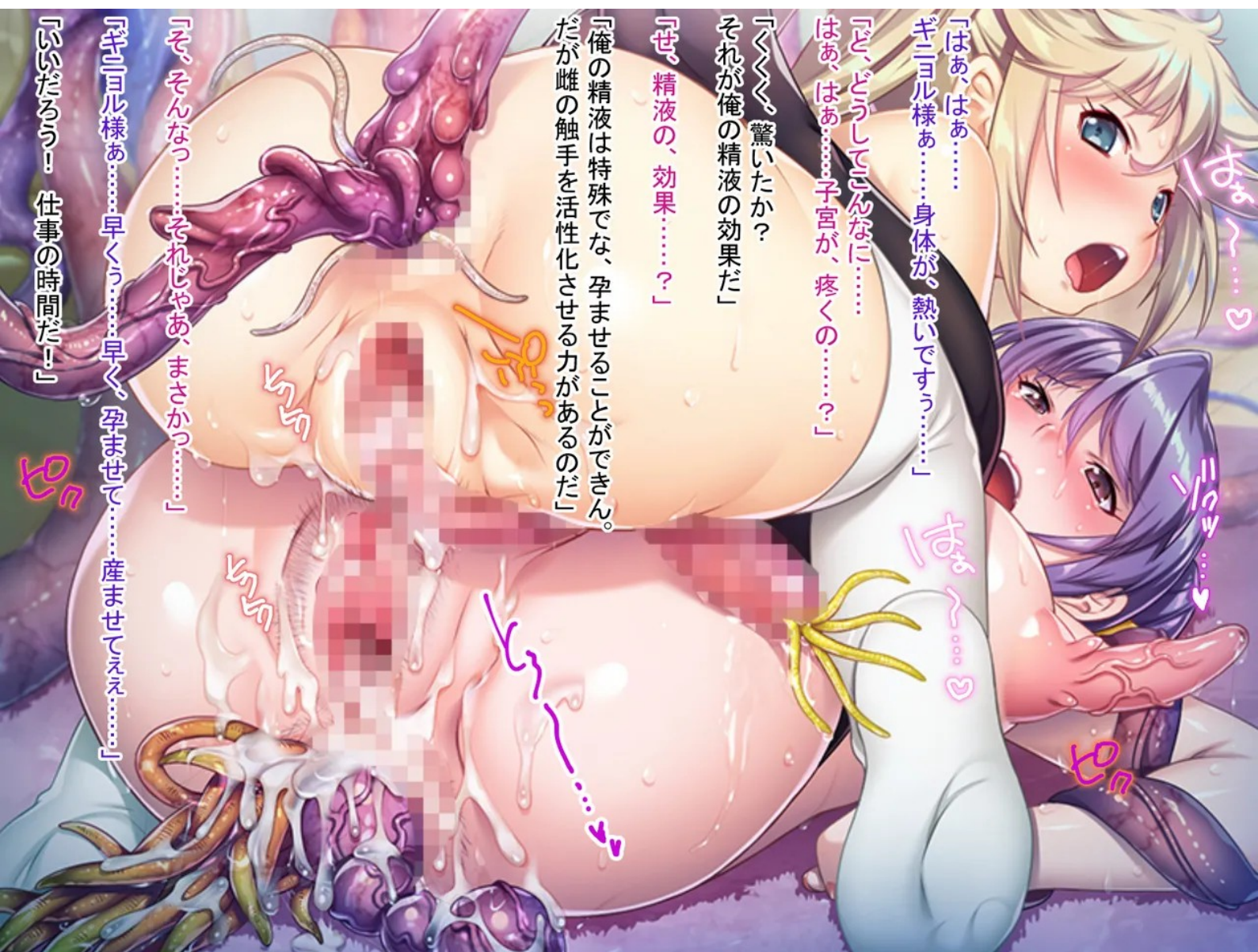
「そおら、たっぷり出してやろう！」

「ひはあああつ……!!」

奥で、熱いのビュービュー出てるぅっ……!!

あつ、あつ、
あああああつ……！」

「さあ、これだけ出せば
すぐに効果が出るぞ？
そろそろ切なくなってきたんじゃないか？」



「はあ、はあ……」

ギニョル様あ……身体が、熱いですう……」

「どうしてこんなに……」

はあ、はあ……子宮が、疼くの……？」

「くくく、驚いたか？」

それが俺の精液の効果だ」

「せ、精液の、効果……？」

「俺の精液は特殊でな、孕ませることができん。だが雌の触手を活性化させる力があるのだ」

「そ、そんなっ……それじゃあ、まさかっ……」

「ギニョル様あ……早くう……早く、孕ませて……産ませてええ……」

「いいだろう！ 仕事の時間だ！」

ぽん

はぁ……♡

はぁ……♡

ぽん





「んはあぁっ、あぁ、あぁっ……
もう、だめえっ……また、きちやうっ……！」

「アタシも、もうイキそうですぅっ……
あぁ、あぁっ、んあぁあぁっ……！」

「おっと、まだイクなよ？
品質を高めるにはこんなものじゃ
足りんのだからなっ」

「あぁっ、あぁんっ……
だったら動かさないで、よぉっ……
あぁあぁんっ……！」

「ギョル様、イカせてくださいっ……
ふぁっ、あぁんっ……！」
「お願いだから、イカせてえっ……！」

「いいや、まだだ！ 限界まで我慢しろ、
でないと酷い目に遭うかもしれんぞぉ！」

「ぞ、そんなぁっ……あぁ、あぁ、
あぁ……あぁんっ……！」

「もっと激しくいくぞー！
絶対にイクんじやないぞー！」

「ほおら！ 寄生させた雄触手のほうも、
もっと強く可愛がつてやろう！」

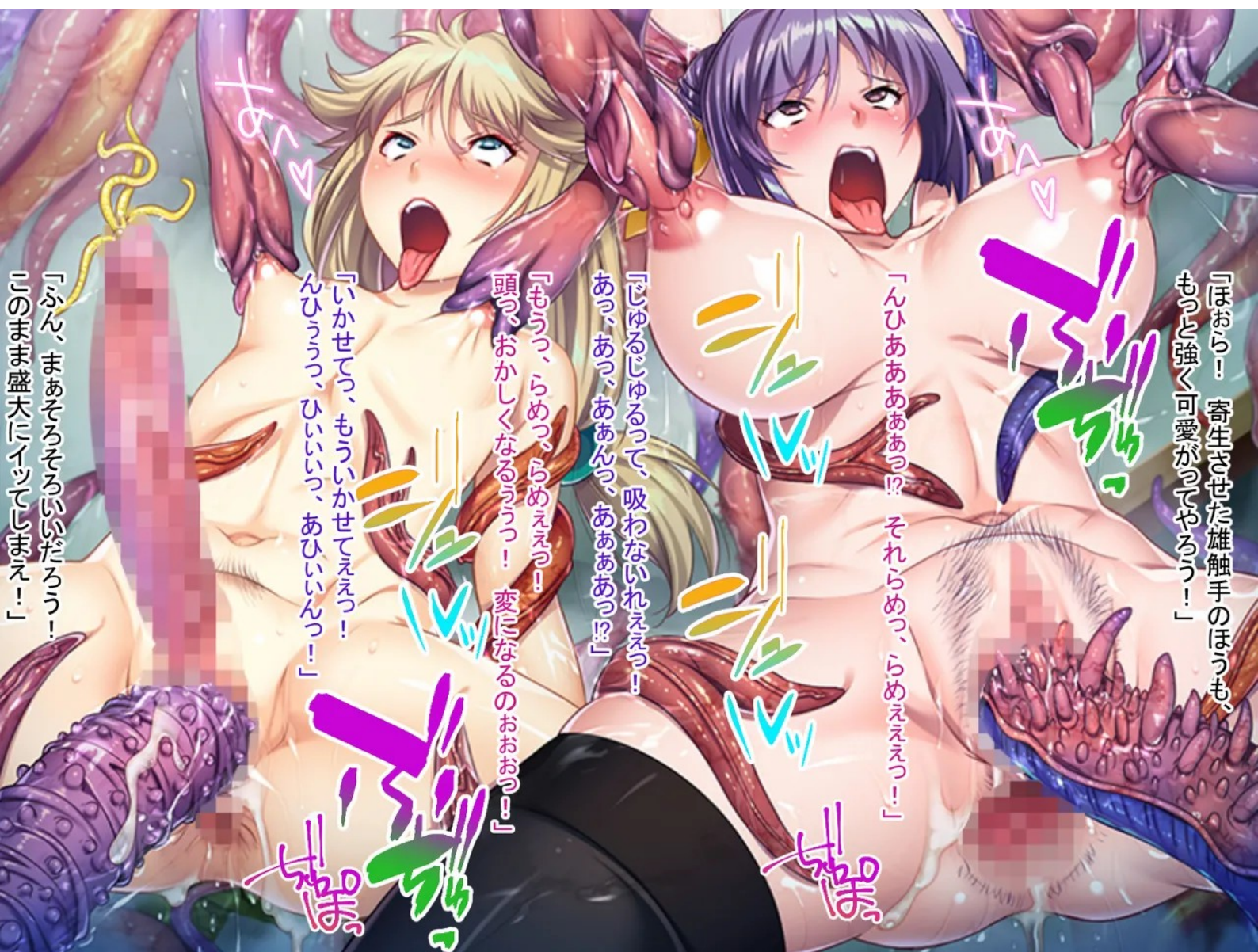
「んひあああああつ!? それらめつ、らめええつ！」

「じゆるじゆるって、吸わないれえつ!!
あつ、あつ、ああんつ、あああああつ!!」

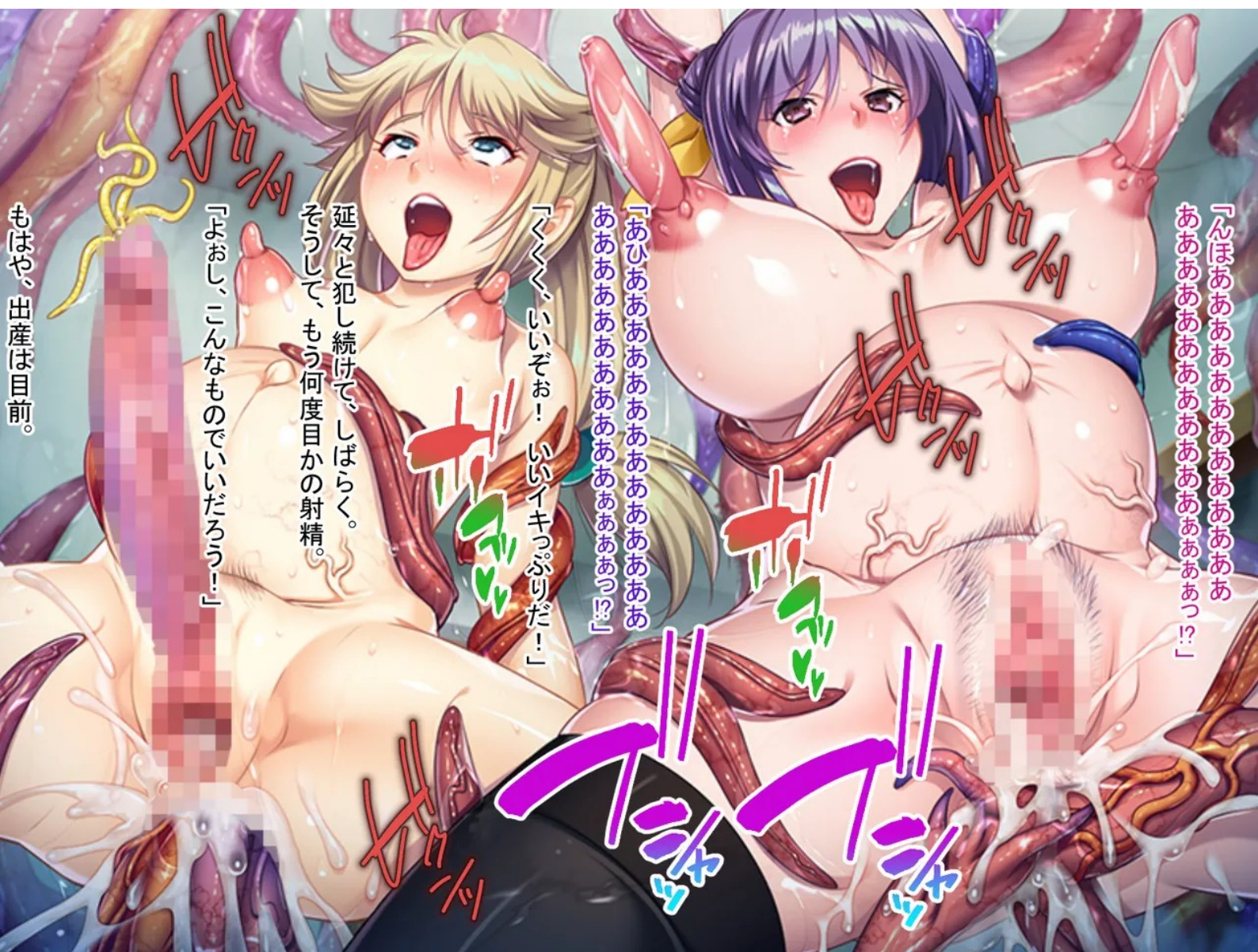
「もうっ、らめつ、らめええつ!!
頭っ、おかしくなるうっ!! 変になるのおおっ!!」

「いかせてっ、もういかせてええつ!!
んひうっ、ひいひい、あひいんっ!!」

「ふん、まあそろそろいいだろう!!
このまま盛大にイッてしまえ!!」







「んほあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ!」

「あひあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ!」

「くくく、いいぞお! いいイキっぷりだ!」

延々と犯し続けて、しばらく。
そうして、もう何度目かの射精。

「よおし、こんなものでいいだろう!」

もはや、出産は目前。



「んはあっ、はひひひっ、あはああんっ……
なにがっ、きてるぅっ……
すっく気持ちいいの、きちやってりゅのおお……」

「くく、その感覚を拒むなよ!!」

「あひあああああっ!! なにかっ、でりゅっ……
気持ちいいの、でりゅっ……」

「ひはっ、ひはあっ、ひはああああっ!!
産まれりゅっ、産まれりゅっ……」

くっ
はあ
はあ

くっ
はあ
はあ

くっ
はあ
はあ

くっ
はあ
はあ

くっ
はあ
はあ





「あゝあああああっ!!

しゅいっ、まだでりゅっ、でりゅんんんっ!!
んひっ、ひあああっ、んはああああっ!!」

「出産っ、気持ちいいよおっ!! 出産しゅきいっ!!
産むの、らいしゅきいっ!!」

自分の仕事に満足感を覚えながら。

俺は、2人の出産姿を見届けていくのだった。

可愛い子どもたちの出産を終えて。

女と小娘は、あまりの快感に揃って気を失った。

だらしないとは思わない。それだけの行為だったのだから。

そしてこれで、

小娘はもちろん女も苗床として完成したと言えるだろう。

これだけの質であれば、どちらもニオルヒム様に上納できる。

この一級品の苗床と、ニオルヒム様の御力があれば、

さぞ素晴らしい触手たちが増えることだろう。

それこそ、こいつらのような悪滅師どもなど

余裕で打倒できるような触手だ。

「さて、そうと決まれば……納品の日まで、

苗床の品質が劣化しないよう維持しなければな」

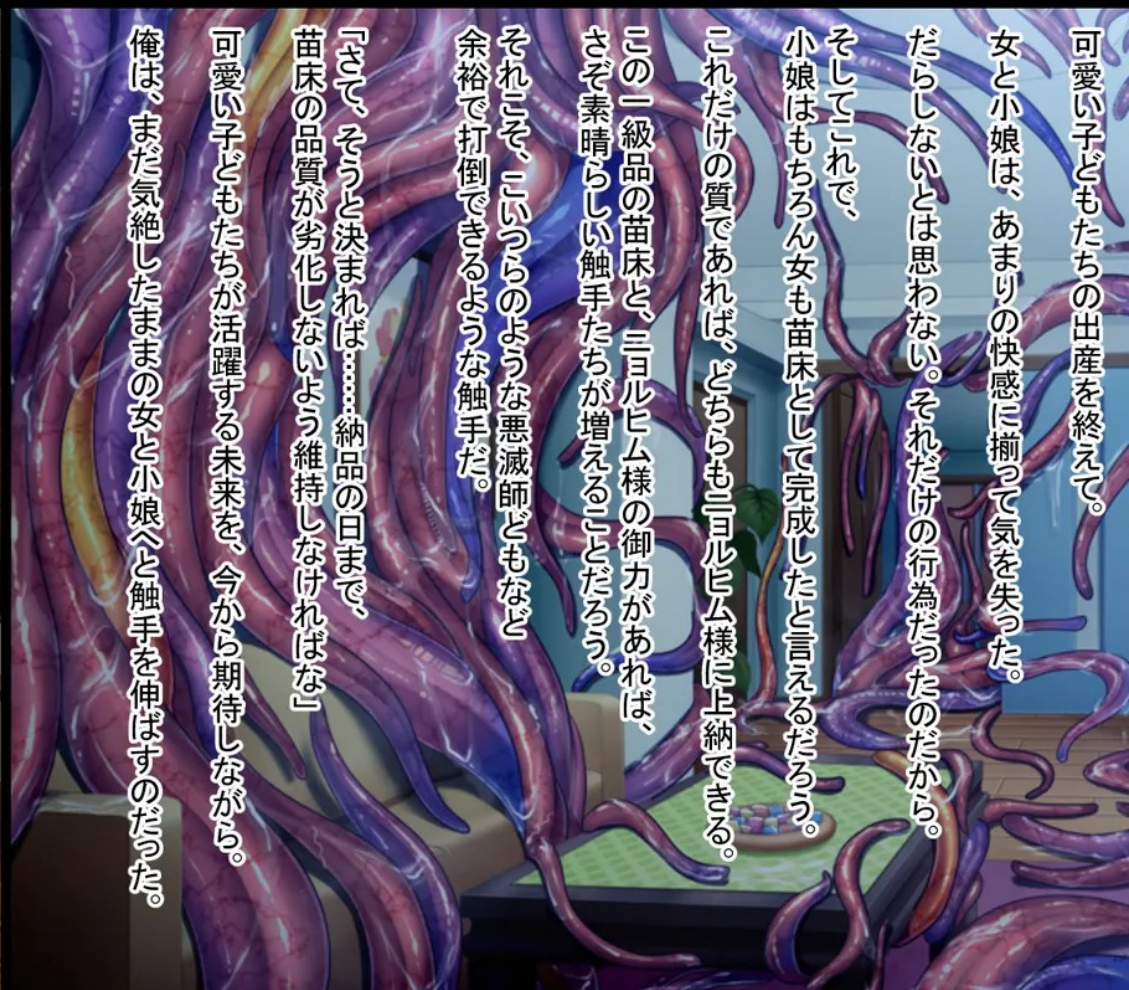
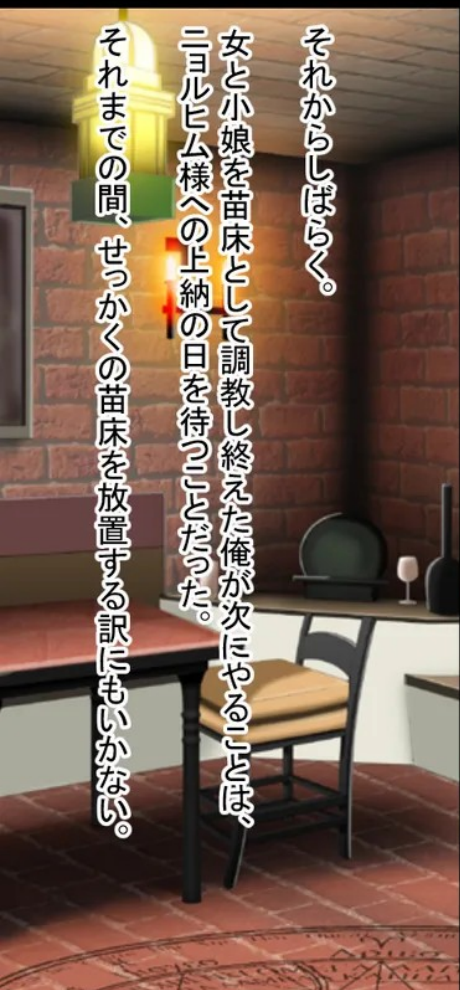
可愛い子どもたちが活躍する未来を、今から期待しながら。

俺は、まだ気絶したままの女と小娘へと触手を伸ばすのだった。

それからしばらく。

女と小娘を苗床として調教し終えた俺が次にやることは、
ニオルヒム様への上納の日を待つことだった。

それまでの間、せっかくの苗床を放置する訳にもいかない。



「あひああ、あつ、ああんっ……！ 乳首っ……！
もっとう、もっと気持ちよくしてえっ……！」
「これしゅきっ、らいしゅきいっ……！
精液もっとうしてっ、また孕ませてえっ……！
ひあんっ、ああんっ……！」

「ふむ、やはり別格だな」

何度達しても物足りず快楽を貪り続けるその様子に、
我ながらいい仕事をしたものだと思える。

「せうかくの逸材、
みすみす手放すのも惜しいな……」

小娘のほうは、もったいないが
ニールヒム様に上納してもいいだろう。
だが女のほうは近年稀に見る逸材だ。
可能ならば、手元に残して
自分のモノにしたい。

「……くく」

どうせニールヒム様は現場のことなど知りはないんだ。バレル訳がない」



—そして、それからしばらく。

俺は予定通りに小娘だけを上納し、
女に関しては手元に残すことにした。
もちろんニールヒム様には報告しておらず、
こっそりと飼っている状態だ。



「んはああんっ、ひおああっ、

あはあああっ……

これっ、しゅきらっ……

乳首じゅぽじゅぽ、しゅきらっ……

んはああっ、ああああんっ……」

「そんなに嬉しいか、

このいやらしい淫乱女めー」

「もっとおっ、もっと……」

気持ちいいっ、もっと……

んはああんっ、ひああっ、ああんっ……」

「ほおら、もっと強くくぞおー！」

「んひあああああつ!?」ゆいっ、ゆいっのおおっ!!
乳首いいっ! 気持ちいいのおおっ!」

「くはっ!! いいぞお、その調子でよがり狂え!!」

「んひいいいいいっ!!」

ひあああつ、あはあああつ、あああああんっ!!
あつ、あつ、んはあああああつ!!」

「くくく、たまらんなあ!!」

「ニオルヒム様には悪いが、これだけはやめられん!!」

ニオルヒム様の庇護下にありながらこのような行為、
本来であれば決して許されない。
だが、だからこそ興奮も大きいというものだ。

「んひあああつ、はああああんっ!!」

もういぐっ、いぐうっ!! んはあああつ、ひああああんっ!!」

「いいぞ、イッてしまえ!!」

「んっひいいいいいいいっ!!」んんんんんんんんん!!

「んっひいいいいいいいいいっ!!」んんんんんんんんん!!

んんんんんんんんん!!

んんんんんんんんん!!

んんんんんんんんん!!

んんんんんんんんん!!



「んっほおおおおおおおおおおお
ああああああああああああああ
ああああああああああああああ
ああああああああああああんっ！」

「くはあああああっ！」

「うわーっ、うわーっ、うわーっ……
乳首、ひゅーひゅーっ……
射精しゅきゅっ、気持ちいいの……
ひああっ、あああああ……」

よほど盛大にイッたのか、
女の絶頂の波はまだ引かない。
乳首射精も止まることなく、
かなりの量を放ち続けている。

「うわーっ、うわーっ、うわーっ……」
乳首、ひゅーひゅーはじける……
射精しゆきづゝ、気持ちのいい……
ひああ、あああああ……

よほど盛大にイッたのか、
女の絶頂の波はまだ引かない。
乳首射精も止まることなく、
かなりの量を放ち続けている。

「はあーっ……はあーっ……
しゅきい……気持ちいいの、しゅきい……」

「はあ、はあ……くくく、素晴らしい絶頂だったな……」

以前から、こうして調教した苗床を取り込んだ
“自慰行為”をするのが趣味だったが。
やはりこの女は格別だ。

「これはもう、手放す気になれんなあ。
ニオルヒム様に気付かれないよう
気をつけねば」

「貴様、やはりそういうことだったか」

「うん、この声は、ニオルヒム様あ」

「このニオルヒム様を騙そうなどと
愚かな真似を。
貴様、自分が何をしたか
理解しているのだろうか！」

「いや、これはその
事情があります。くく」

「黙れ！ 貴様には罰を与えるー」



『触手地獄に堕ちる！　そこで死ぬまで悔み続けるがいい！』

「に、逃げなければ……！　お、おい女！　排出するぞ！」

「はあ、はあ……やだあ……」

もっとお……もっとお持ちよくしてくらさい……」

「なる？　貴様、この状況がわからんのか？
離せ！　離さんかあ！」

「もっとお……もっとお持ちよくしてええ……」

「あ、後でしてやる！
だから今は、今だけは離せ！」

すでに正気を失っている女には、
俺の言葉など届かず。

女はまだこの状況を理解していないのか、へらへらと笑うだけ。

そんな女を、憎しみを込めて睨みつけながら。

俺には、絶望する」としかできないのだった……。



©アパタイト